

いじめられる子ども・いじめる子どもとの関わり

1 はじめに

いじめとは、「自分よりも弱いものに対して一方的に身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」です。個々の行為がいじめに当たるかどうかの判断をする際には、いじめられた子どもの側に立ち、「本人がいじめられていると感じれば、それはいじめである」という観点からいじめの実態を広くとらえていくことが大切です。

この章では、いじめの理解と指導について考えていきます。

2 いじめの問題に関する基本的な考え方

1996年7月文部省の「いじめ問題の解決に向けて一人一人が行動するとき（児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力会議 報告）」では、いじめ問題に関する基本的な認識として5点が示されています。

1	「弱い者をいじめることは人間として絶対に許されない」との強い認識に立つこと	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような社会にあっても、いじめは許されない、いじめる側が悪いという明快な一事を毅然とした態度で行き渡らせる。 ・いじめは子どもの成長にとって必要な場合もあるという考えは認められない。 ・いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為もいじめる行為と同様に許されない。
2	いじめられている子どもの立場に立った親身の指導を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの悩みを親身になって受け止め、子どもの発する危険信号をあらゆる機会をとらえて鋭敏に感知するように努めること。 ・自分のクラスや学校に深刻ないじめ事件が発生し得るという危機意識を持つこと。 ・いじめの件数が少ないことのみをもって問題なしとすることは早計。
3	いじめは家庭教育の在り方に大きな関わりを有していること	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの問題の解決のために家庭が極めて重要な役割を担う。 ・いじめの問題の基本的な考え方は、まず家庭が責任を持って徹底すること。 ・家庭の深い愛情や精神的な支え、信頼に基づく厳しさ、親子の触れ合いの確保。
4	いじめの問題は、教師の児童生徒観や指導の在り方が問われる問題であること	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の過度の同質志向を排し、個性や差異を尊重する態度やその基礎となる新しい価値観を育てる指導の徹底。 ・道徳教育、心の教育を通してかけがえのない生命、生きることの素晴らしさや喜びなどについて指導。
5	家庭、学校、地域社会など全ての関係者がそれぞれの役割を果たし、一体となって真剣に取り組む必要があること	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの解決に向けて関係者全てがそれぞれの立場からその責務を果たすこと。 ・地域を挙げた取り組みも急務。

Q1 どのように「いじめ」を発見していけばよいのでしょうか。

「いじめ」を発見することは、とても難しいものです。「いじめ」は、見つからないように行われるものですから、発見しにくくなります。もし、早期に発見できれば、子どもの心の傷も浅くて済みます。発見が遅れれば遅れるほど、解決は難しくなります。ですから、保護者や教師が注意を払うことで、早期に指導・援助ができるようにする必要があります。次のようなポイントを参考にしましょう。

保護者

- ・口数が少なくなり、元気がなくなる。
- ・登校を渋るようになる。
- ・食欲がなくなる。
- ・体調不良を訴えるようになる。
- ・部屋に閉じこもるようになる。
- ・友達のことを話題にしなくなる。
- ・衣服が汚れていたりする。
- ・怪我をしていることがある。
- ・持ち物がなくなったりする。
- ・家庭から品物やお金を持ち出そうとする。
- ・寝ている時に、うなされている。

教師

- ・浮かぬ表情をするようになる。
- ・いつも遊んでいる友達と遊ばなくなる。
- ・授業に遅れてくる。
- ・ひとりでぼつんとしていることが多い。
- ・衣服が汚れていたり、泥がついていたりする。
- ・持ち物がなくなったり、隠されたり、落書きされたりする。
- ・発表すると、冷やかされたりする。
- ・体調不良を訴え、保健室へ行くようになる。
- ・相談したい素振りで、教師の近くをうろうろする。
- ・欠席、遅刻、早退が増える。



Q2 いじめられても、訴えることができない子どもがいます。子どもは、どんな気持ちなのでしょう。

仕返しが怖い

チクッタ（告げ口をした）ことが分かったら、もっとひどい目にあう。

親に心配をかけたくない

親が知ったら、きっと悲しむにちがいない。自分が我慢すれば・・・

ひとりぼっちは嫌だ

仲間はずれにされるより、いじめられても、みんなと一緒にのほうがまだいい。

いじめられていることを認めたくない

いじめられていることを認めるのはみじめだ。弱い自分を認めたくない。

先生は分かってくれない

先生に「君にも悪いところがある」と言われるに違いない。言っても、どうせ分かってももらえない。

言うだけ無駄

言っても何も変わらない。相談しても、何もしてもらえない。いじめはなくならないんだ。

相談をしたくても相談できないのです。いじめられている子どもは、自分一人で、いじめられている辛さなどを抱え込んでいるのです。子どもの辛さを、先ず理解しましょう。

◇ 事例 いじめられた男子の気持ち（インタビュー取材時：中学2年生）

小学校の一年生から始まりました。はじめのうちは、近所に住む同じクラスの子から「変態」とか心ない言葉を浴びせられていました。次第にその噂が広がりはじめ、ものをぶつけられたり、仲間外れにされるようになってきました（以後四年生まで続く）。いじめられているという感覚ははじめのうちはありませんでしたが、ひとりぼっちになるよりはかまってもらえるからいいと思っていました。また、相談できる友達や先生もいましたが、話すことによって迷惑をかけてしまうのではないかと思い、尻込みをしてしまいました。

三年生になりクラス替えがありました。「いじめ」の中心的な子とは、学級が離れました。しかし、すぐに別の友達から身体的な悪口や無視、仲間外れが始まりました。ひどいときには、わたしがドッジボールの仲間に入れてほしいと頼むとドッジボールが終わってしまいます。別の友達とあそんでいるとドッジボールが始まったりして友だちを取り上げていってしまいます。

四年生になるともっとひどくなりました。自分の持ち物が壊されたり、隠されたりすることが多くなってきました。見つかるはずもない場所から自分の持ち物がたびたびでてくることもありました。特に新品のものを持っていくと必ず何かをされました。学校だけではなく、塾に行っても同じようなことがありました。何か全体を敵に回しているような感じで怖くて仕方ありませんでした。ようやく四年生が終わる頃になって学級担任の先生に相談をもちかけました。

五年生になり、少しずつ回復の兆しが見えてきました。けれども、急に悲しいときのことを思い出して涙が出てきたりして、自分をどうすることもできないときがありました。何にでも挑戦してみることで、自分に目標を持たせていましたが、何か満足できないものを感じていました。挑戦しても必ずうまくいくことばかりではありませんでした。

Q3 いじめられている子どもとは、どのように関わればよいのでしょうか。

いじめを発見したとき、いじめは人権に関わる問題で絶対に許すことはできない行為であるという立場で、いじめられていた子どもに寄り添います。

① 共感的に接する	子どもの話を丁寧に聞きます。いじめを受けていたとき、子どもが抱え込んでいた不安や辛さなどの気持ちに共感しながら聞きます。
② 具体的ないじめの事実を理解する	話の内容を整理しながら、子どもの話を聞きます。いじめに関する事実関係を確かめます。
③ 「絶対にあなたを守る」という態度で接する	「もう心配しなくてもいいよ。いじめは許さない。絶対にあなたを守る」という姿勢を示すことが必要です。子どもが安心できるように、「何がしてほしいか」、「何がしてほしくないのか」を理解しましょう。
④ 打ち明けてくれた勇気をほめる	いじめられていた事実を話すことは、子どもにとってとても辛いことです。勇気を出して打ち明けることができたことを、認め、ほめます。
⑤ 解決に向けた指導・援助について、方針と見通しを伝える	いじめられた子どもの気持ちを尊重しながら、解決のために指導の方針を決めていきます。速やかに学年会、生徒指導委員会、職員会などで具体的な対策を検討します。決定したことを、子どもにも伝えます。

教師は、いじめられていた子どもの支えになりましょう。

子どもの訴えに耳を傾けましょう。傷ついた心を慰めながら、子どもの心に寄り添っていきます。

子どもの性格や特性を受け止めます。よい面について「あなたの～のところが素晴らしいね」と認めます。

いじめを受けた子どもから目を離してはいけません。子どもの様子をつかみ、声かけを心がけましょう。

子どもと一緒に考えたり、行動したりします。継続的に関わり、子どもとの信頼関係を深めていきます。

子どもの気持ちがいっそう安定するように、関わりを続けましょう。

一緒に話をしたり子どもの気持ちを文章などに表現したりします。自分を振り返り、自分を知るチャンスにします。	場に応じた自己表現の仕方、友達との望ましい関わり方を一緒に考え、身に付けられるように援助しましょう。	子どものわずかな変化や伸びを見つけます。子どもを認めたり、ほめたり、励ましたりしながら、自信をもたせましょう。	子どもの気持ちを分かってくれる友達の力を借ります。よき理解者を増やすために、友達づくりの協力をします。
--	--	---	---

◇ 事例 周りから認められ、自信がもてるようになった小学生の事例

① 仕事を任せる

本児が動植物を大切にしていたことから、植物の世話を任せました。一人で全て行うことはできませんので、はじめは一人の友達と一緒に活動することを勧めました。毎日行う仕事ですから、根気が必要です。しかし、植物は成長し、花が咲き、実や種を取ることができるので、一定の成果が得られます。

また、友達と一緒にいることによって得られたことなので、喜びを分かち合うことができました。自然に心が通い始め、仲のよい人間関係を築くことができました。

※ 好まれない仕事でしかも結果が得られない仕事を任せるのは、かえってマイナスです。

② 友達の輪が広がる

すると、別の友達へと輪が広がり始めました。本児を含めた楽しい集団ができあがってきました。明るい表情や言葉も多くなってきました。

「いじめ」を怖がって傍観していた子どもたちが解放された気分になりました。本児と一緒にいる子どもの人数が多くなってきました。心と心で通じた人間関係です。

③ いじめを許さない学級の雰囲気づくり

学級にも、活気と明るさが満ちあふれてきました。本児を「いじめ」から守ろうとする子ども同士の姿が見られるようになりました。独りぼっちにしない、独りぼっちにさせないという雰囲気も生まれました。

やがて、「いじめ」をしていた子どもも簡単には、本児をいじめることができなくなりました。追従していた子どもたちも、無理な命令などを聞くことが苦痛になり、いじめをしていた子どもから離れていきました。暗いどんよりとした一部の集団が解消されていきました。

この事例のよさを生かしましょう。

◇ 友達をつくる環境を設定し、整えていくこと

「いじめ」を受けていた子どもは、なかなか自分から仲間の中に積極的に入っていくことができません。後込みをしています。ほかの子どもも、てのひらを返したような態度で接することはできません。

係活動や遊びの活動などどんなことでもいいので、気軽に接することができたり、協力しなければならぬ状況をつくってみてください。そうすれば、お互いの良さに気づき合う場面が生まれます。違和感が少しずつ薄らいできます。明るい表情で楽しそうに友達と過ごす変化によって、「いじめ」を受けにくくします。

◇ 本人が自信と充実感をもち、周りから認められるようにすること

一つのことを行う時、やり遂げるまでに非常に時間がかかったり、中途半端になってしまい十分な結果が得られないことがあります。ですから、無理なく継続的に、誰から見ても価値ある仕事や役割を任せてみることです。一つのことをじっくりと行うことによって、成し遂げた充実感がもてるはずで、周りの子どもも頑張っている姿を素晴らしいと感じることでしょう。

Q4 いじめた子どもとは、どのように関わればよいのでしょうか。

◇ いじめの事実を明らかにし、自分の言動を振り返らせること

- ・ いじめの事実を、丁寧に一つ一つ確認します。
- ・ いじめの非人間性や相手の人権を侵す行為であることに気付かせます。
- ・ 相手の痛みを理解できるように、教育的な指導を徹底して行います。

※ いじめられた子どもは、いじめを深刻にとらえています。長期に渡って、頻度も多く、複数の友達からいじめられれば、心の傷は相当に深くなります。辛さや苦しみなどを具体的に説明しながら、いじめられた相手の気持ちを感じることができるようになります。いじめた自分の言動をきちんと見つめ、相手に対して済まないことをしたと心から言えるようにします。

◇ いじめざるを得ない気持ちを理解する

- ・ 保護者の協力を積極的に求めながら、子どもがもっている不満や充足感を味わうことができない気持ちを理解する。
- ・ いじめを行った子どもが、心理的な孤立感や疎外感を感じないように一定の教育的配慮をする。
- ・ 悪者扱いをしないで、いじめざるを得なかった気持ちに寄り添いながら、忍耐強く関わる。

- ・ ストレスをうまく発散できないために、いじめを行ってしまう。
- ・ いじめられた経験があり、仕返しのため、誰か弱い相手をいじている。
- ・ 自分が我慢していることを、平気でやっている相手を見て、許すことができなかった。
- ・ 先生や友達から大事にされているのことに反感を覚え、いじめるようになった。
- ・ 自分のライバルだから、負けたくないのはいじめている。
- ・ 勉強が分からない。面白くないのでいじめをしている。 等

※ いじめた子どもの中には、以前自分がいじめられた経験をもつ子どももいます。ですから、この子どもたちの心をいやすとともに、この子どもたちも守ることを約束しましょう。

いじめた理由は、正当な理由でないかもしれませんが、しかし、まず共感的に話を聞き、本人から話をさせましょう。そして、自分を振り返らせ、自分の口から悪かったことを話させましょう。いじめという行為そのものは許されることではありません。しかしながら、いじめた子ども自身を否定してはいけません。同じように大切な仲間であることを、絶対に伝えましょう。

◇ よりよい生き方への見通しがもてるように指導をする

- ・ いじめが人として許されない行為であることを自覚させる。
- ・ 相手に対する謝罪の仕方、自分の行為に対する責任の取り方などを一緒に考える。
- ・ 子どもの実態に即して、今後の学校生活に目的がもてるようにする。
- ・ 人間関係や生活体験などにおいて、喜びや満足感がもてる場を意図的に設ける。
- ・ 学習が遅れがちなる子どもに対しては、十分な補充指導を行うことも必要になる。

- 《 参考文献》
- | | | |
|---------------------------|------------|-----------|
| ・ いじめ ーのりこえるにはどうするか | 詫摩 武俊 著 | サイエンス社 出版 |
| ・ いじめ・登校拒否に負けない | 坂本 光男 著 | 旬報社 出版 |
| ・ ポケット | 福井県教育研究所 | |
| ・ いじめ問題の解決に向けて一人一人が行動するとき | 1996年7月文部省 | |